

## 研究資料

# コスタリカ共和国首都圏における野球普及の実態に関する調査研究

藤谷 雄平\*・山田 理恵\*\*

## I はじめに

2023 World Baseball Classic（以下、「WBC」とする）で日本が優勝し、国内で大きな盛り上がりを見せた。しかしながら、WBCに参加した国と地域をみると予選を含め 28 と非常に少なく、世界的に WBC が盛り上がったとは言い難い。そもそも野球は世界的に普及度が低く（IOC, 2005, pp.105-110）、2012 年ロンドンオリンピック以降正式種目から除外された。東京 2020 オリンピックにおいては、野球は追加競技として採用されたが、その背景には、国際オリンピック委員会（以下、「IOC」とする）が 2014 年に「Olympic Agenda 2020」を決定したことが影響している。その中で、従来の大会で正式競技数が 28 と規定されていた制度が見直され、競技数の上限を撤廃のもと、新たに競技参加者数は約 1 万 5000 人、コーチおよび選手支援者数は 5000 人、種目数は 310 以内という新たな制度が導入された（IOC, online, p.31）。さらに、IOC は開催地が一つ以上の追加競技の提案を行うことを認めた（IOC, online, p.31）。これらの変更により、従来の規定よりも開催国側の自由度が高まり、日本で人気の高い野球が追加競技として採用されたといえる。しかしながら、2024 年のパリオリンピックでは、

フランスで野球が盛んに行われていないため、野球が追加競技として採用されなかつたと考えられる。このことからも、世界的に野球が普及していないといえる。

一方、2012 年ロンドンオリンピックで正式種目から除外されて以降、野球界では様々な動きがみられた。その中の一つとして野球の普及・振興活動が挙げられる。まず、世界野球ソフトボール連盟（World Baseball Softball Confederation, 以下、「WBSC」とする）は、2017 年から野球振興プログラムである「DEVELOPMENT PROGRAMMES 2017-2021」（WBSC, online1）を開始し、現在は第 2 期の「DEVELOPMENT PROGRAMMES 2022-2024」（WBSC, online2）を実施している。具体的には、野球振興として、エリートアスリートやチームへの補助金、コーチや審判への技術指導、ナショナルコーチング体制の整備、野球の施設や設備への補助金等の活動を実施している。また、野球普及として、学校および地域社会のプロジェクトに対する支援、技術機材の提供とスタートキットの提供等の活動を実施している（WBSC, online1; WBSC, online2）。

日本では、長年、独立行政法人国際協力機構（Japan International Cooperation Agency, 以下、「JICA」とする）が中南米、アジアやアフリカを中心とした開発途上国に対して野球の長期隊員

\*鹿屋体育大学大学院体育学研究科体育学専攻, \*\*鹿屋体育大学スポーツ人文・応用社会科学系

(以下、「JICA 野球隊員」とする) の派遣を行い、普及・振興活動を行なっている。また、JICA は、2015 年に桜美林大学、福岡大学と北九州市立大学、2017 年に近畿大学等と大学連携ボランティア派遣事業を締結し、各国に野球の短期ボランティア隊員を派遣した (JICA, online)。これまで、JICA は野球の長期・短期隊員を計 508 人派遣しており (2023 年 3 月 15 日時点), JICA のスポーツ隊員の中では野球隊員が最も多い (JICA 海外協力隊, online1)。本研究で対象とするコスタリカ共和国 (以下、「コスタリカ」とする) では、1974 年から JICA による野球隊員の派遣が開始され、2000 年から 2008 年は派遣が停止されたものの、2009 年から再開された (宮崎, 2016, p.105)<sup>(1)</sup>。

このように、野球の普及・振興活動は様々行われているが、開発途上国を中心に野球が盛んでない地域における野球の実態、現状について明らかにしている研究は少ない。このような中、宮崎 (2016, 2017, 2018, 2019, 2020, 2021) は、大学連携ボランティア派遣事業を通じたコスタリカにおける野球の普及・振興活動の活動成果や活動に参加した自学生のキャリアを中心に報告している。瀧元ほか (2011) は、ブルキナファソにおける野球の普及・振興活動が開始した経緯およびその過程について報告している。石原 (2011) はジンバブエ共和国を事例に挙げ、野球の普及活動を通じてプロ選手が輩出されることで、援助側が意図しないところで労働力リソースの拡大が生じることについて指摘している。また、石原 (2019) は、日本によるアフリカでの野球の普及活動を通じてプロ野球選手が輩出されることを事例に、スポーツを通じた開発援助の課題について批判的に指摘している。これらの先行研究は、対象国の野球の普及・振興活動の成果やそれらの活動によって起こる事柄について論じられている。しかしながら、野球の普及・振興活動が行われる対象国の野球の実態、つまり野球のハード面やソフト面の

基礎的な部分に関することについて論じられていない。野球の普及・振興活動をより活発に、より発展的に行なっていくためには、まず、それらの活動を行なっている国の野球の実態について研究の蓄積をしていき、効率的な野球普及・振興活動の方策を検討することが重要であると考えられる。

そこで、本研究では、長年 JICA による野球の普及・振興活動が行われているコスタリカを対象に、フィールドワークを通じて野球のハード面とソフト面の現状について明らかにすることとした。具体的には、2018 年 1–3 月と 6–8 月に実施したフィールドワークを基に、ハード面では野球のグラウンドの施設と環境、野球用具について、ソフト面ではサントドミンゴ野球協会を事例とし、普及・振興活動の実態について明らかにする。

以降の本論では、II 章でコスタリカおよびコスタリカ野球の起源について概観する。なお、先行研究に関して、コスタリカの国立図書館であるミゲル・オブレゴン・リザーノ国立図書館 (La Biblioteca Nacional Miguel Obregón Lizano) でコスタリカの野球の歴史に関する著作物を検索し、Masís Ángel Miguel Acosta (2006) の『Historia del béisbol: origen y revolución en los Estados Unidos y Costa Rica』のみ該当したため、それを参考に概観する。また、III 章およびIV 章の本文中に限り、特に文献および注記のない限り、それらは全てフィールドワークで得られたデータに基づいている。

なお、本研究は鹿屋体育大学人文・社会科学系倫理審査小委員会の承認を得た。

## II コスタリカおよびコスタリカ野球の概要

### 1 コスタリカの基礎データ

コスタリカは中央アメリカに位置しており、

面積 51,100 km<sup>2</sup>, 人口約 5,153,957 人で首都はサンホセである（外務省, online; Word Bank, online1）。言語はスペイン語を使用し、民族は、「ヨーロッパ系及び先住民との混血が多数」である（外務省, online）。コスタリカの主要産業はコーヒーやバナナなどの農業、観光業である（外務省, online）。2019 年の経済指標は、GDP が 618.01 億 US \$ (Word Bank, online2), 一人あたりの GDP が 12,243.8 US\$ (Word Bank, online3), 一人あたりの GNI が 11,700 US\$ で (Word Bank, online4), 開発途上国の中位中所得国に分類されている（OECD, online）。

コスタリカにおけるスポーツでは、サッカーが文化として根強く定着している。コスタリカにはサッカーのプロリーグも存在し (Federación Costarricense de Fútbol, online), FIFA World Cup では、2014 年ブラジル大会でベスト 8, 2018 年ロシア大会, 2022 年カタール大会出場の功績もあり (NHK, online), サッカーはコスタリカ国民から絶大な人気を誇っている。野球においては、WBSC 男子野球ランキングが 85 の国と地域中 78 位 (2019 年 12 月 31 日時点) であり (WBSC, online3), あまり盛んでないといえる<sup>(2)</sup>。

## 2 コスタリカ野球の起源

本節では、現地の国立図書館で収集した文献 (Masís, 2006) を中心に、補足資料を用いながらコスタリカ野球の起源について概観する。近代スポーツの野球がコスタリカに伝播したのは 1800 年代の後半とされ、鉄道が関係していた (Masís, 2006)。JICA が国際開発センターに委託したコスタリカでの交通調査事業に参加している鈴木 (1984) は、コスタリカの鉄道史に関する研究資料を翻訳・紹介している。それによると、1840 年頃からコスタリカでコーヒー産業が繁栄し、「コーヒーを栽培する中央メセタと産物をできるだけ早く世界市場に送り込む起点となる大西洋沿

岸地方との間を結ぶ適切な輸送機関の設置が必要となった。」(鈴木, 1984, p.7) とされる。そして、ピーター (2018) によると、1870 年代にアラフェラトリモンを結ぶ鉄道を建設するため、アメリカのニューオリンズで「アメリカの南北戦争の退役軍人」(ピーター, 2018, p.37) や「元囚人」など (ピーター, 2018, p.37) を労働者として雇つたとされる。Masís (2006) は、そのアメリカ人労働者たちがコスタリカに野球用具を持ち込み、鉄道建設の余暇に野球を行っていたことが伝播した起源であると述べている (Masís, 2006, pp. 85-86)。コスタリカの隣国であるニカラグア共和国で野球が 1889 年に伝播したことからも (Gordon, 2006, p. 177; McGehee, 2002, p.175), コスタリカでは鉄道建設が始まった 1870 年代から 1890 年代中頃の間に野球が伝播したと考えられる。

1897 年、カリブ海に面し、鉄道建設地点となつたリモンにおいて、コスタリカで初めて野球の試合が行われた (Masís, 2006, p. 86; Federación Costarricense de Béisbol, online)。また、Masís (2006) によると、初めて試合が行われた 9 年後の 1906 年に、コスタリカにおいて初の正式な野球チーム、「ソシエダ・スポーツ・サンホセ・ベースボール (Sociedad Sport San José Baseball)」(Masís, 2006, pp. 86-87) が創設され、その後、「ソシエダ・アトレティカ・デル・リセオ・デ・コスタリカ (Sociedad Atlética del Liceo de Costa Rica)」(Masís, 2006, pp. 86-87) というチームも創設された。同年 9 月 23 日に首都サンホセでこの 2 チームの初めての試合が行われたとされている (Masís, 2006, pp. 86-87)。

## III コスタリカのハード面

本章では、コスタリカにおける野球のハード面、特に野球の専用グラウンドと用具の現状に焦点を当て、フィールドワークで得られた情報をも

とに明らかにしていく。また、本文では、スタジアムと野球専用グラウンドという言葉を用いている。スタジアムとは、『最新スポーツ大事典』(岸野編, 1987)によれば「トラックやフィールドに観覧席を備えた大型の運動競技場」であり、「今日では陸上競技場のほかに野球場、フットボール場などにもこの名称が用いられている」(岸野編, 1987, p.505)とされている。そのため、本研究では、バックネット裏(本塁後方), 1, 3塁側に観客席を備えている野球専用グラウンドをスタジアムと表記し、それ以外については野球専用グラウンドと表記する。

## 1 野球専用グラウンドとその環境

コスタリカには、14の野球専用グラウンドがある(宮崎, 2016, p.105)。そのうち、スタジアムが三つある。コスタリカで最も有名なスタジアムは、アントニオ・エスカレ・スタジアム(Estadio Antonio Escarré)である(写真1)。このスタジアムは、1941年に当時のコスタリカ大統領であるラファエル・アンヘル・カルデロン・ガルディア(Rafael Ángel Calderón Guardia)がスタジアムの建設を命じ、1944年に竣工した(Masis, 2006, pp.100-105; Federación Costarricense de Béisbol, online)。1961年にはこのスタジアムで中南米大会が開催され、その際に照明設備も設置された

(Federación Costarricense de Béisbol, online)。現在もコスタリカの全国大会で使用され、コスタリカを代表するスタジアムである。次に、コスタリカで初めて野球が行われたリモンにあるビッグ・ボーイ・スタジアム(Estadio Baseball Big Boy)である(写真2, 3)。そして、コスタリカ北部のウパラにあるウパラ・スタジアム(Estadio de béisbol de Upala)である(写真4)。他にも、野球専用グラウンドでは、アラフェラ野球協会が使用するポリデポルティーボ・モンセラット(Polideportivo Monserrat)(写真5)、サントドミンゴ野球協会が使用しているポリデポルティーボ・デ・サントドミンゴ(Polideportivo de Santo Domingo)とそれに併設して約225m<sup>2</sup>の屋根付き練習場がある(写真6)。このように、コスタリカのスタジアムおよび専用グラウンドはいずれも良好な状態で維持され、使用されている。

コスタリカのグラウンドとその環境を比較するために、同じ中南米にあるペルー共和国とアフリカにあるジンバブエ共和国の例を挙げる。ペルー共和国はコスタリカと同様に上位中所得国に分類されている(OECD, online)。WBSCランクイングでは、ペルー共和国はコスタリカ(78位)よりも上位で42位に位置している。ペルー共和国は、JICAと近畿大学が締結した大学連携ボランティアによる短期ボランティアを受け入れてい



写真1 アントニオ・エスカレ・スタジアム  
(本塁左後方の観客席から 筆頭著者撮影)



写真2 ビック・ボーイ・スタジアム  
(本塁からセンター方向 筆頭著者撮影)



写真3 ビック・ボーイ・スタジアムの観客席  
(一塁から本塁方向 筆頭著者撮影)



写真4 ウパラ・スタジアム  
(マウンド横から本塁と観客席方向 筆頭著者撮影)



写真5 ポリデボルティーボ・デ・モンセラット  
(1塁ベンチ裏側から 筆頭著者撮影)



写真6 ポリデボルティーボ・デ・サントドミニゴ  
(バックネット裏から 筆頭著者撮影)

る。その活動の報告書（角上ほか, 2015；中村ほか, 2019）によると、首都リマに、野球専用グラウンドが六つあるとされる。コスタリカにも首都圏に同程度のスタジアムや野球専用グラウンドがある。そのため、コスタリカはWBSCランキングが低いが、コスタリカのグラウンドに関するハード面はペルー共和国と同程度整っていると考えられる。

また、ジンバブエ共和国は下位中所得国に分類されるが、WBSCランキングは53位とコスタリカよりも上位である。ジンバブエ共和国では、1998年に唯一の野球専用野球場（ここでいう野球専用グラウンド）であるハラレ・ドリーム・パークが建設された（石原, 2019, p.83）。一時、ハラレ・ドリーム・パークを維持できず、雑草

が荒れ放題となっていたが（石原, 2019, p.83），現在は手入れを行い使用している（ジンバブエ野球会, online）。このようにジンバブエ共和国と比較してもWBSCランキング下位のコスタリカの方が野球専用グラウンドやスタジアムを保有している。このことからもコスタリカにおけるグラウンドに関するハード面は整っていると考えられる。

## 2 野球用具の現状

コスタリカで野球用具が販売されているかについて、コスタリカの首都圏であるサンホセ、エレディア地域を中心に調査した。まず、地図アプリケーションで、スポーツ用品店（Tienda de deportes, Tienda de artículos deportivos, Tienda

deporte) で検索し、8 店舗がヒットした。そのうち 7 店舗がサッカー以外の用具を取り扱っているとの情報をサントドミニゴ野球協会のコーチおよび選手から得られたため調査した。その結果、「ウノ・スポーツ・エスカス (UNO SPORTS ESCAZÚ)」という 1 店舗のみ野球用具が販売されていることが確認できたが、用具の種類および品数は非常に少なかった。また、コスタリカでは、野球用具をどのように購入しているかについて、3 人の選手 (11 歳、15 歳、17 歳) に聞き取り調査を実施した。その結果、Electronic Commerce サイト (以下、「EC サイト」とする) を通じて海外の野球用具を購入していた。他にも、宮崎 (2016) によれば、パナマやニカラグアから購入する選手もいるとされている (宮崎, 2016, p.106)。これらのことから、コスタリカでは野球用具が十分に流通しておらず、外国から購入していることが明らかになった。

個人における用具の所有状況について、首都圏の多くの選手が所有しており、地方では所有している選手は少なかった。例えば、首都圏にあるサントドミニゴ野球協会では、選手のほとんどがグローブを所持していた。バットに関して、5 歳から 10 歳の選手で所持しているものは少なかったが、11 歳以上の選手の多くは所持していた。その要因として、選手の家庭の生活水準が高く見受けられたこと、桜美林大学がサントドミニゴ野球協会へ野球用具を寄付していたこと、サントドミニゴ野球協会内で行われるリーグ戦の優秀選手や「ガナドレス・ショウ・デ・タレントス (Ganadores Show de Talentos)」という野球イベント (ホームラン競争、送球コンテスト、コントロールコンテストやバントコンテストなど) の景品として、その寄付された野球用具を選手に分配していたことが挙げられる。また、地方のリモンやウパラ、ラ・クルースでは、小学生年代の選手の多くは貸出グローブを使用していた。宮崎 (2016) が指

摘するように、地方では野球用具の不足が深刻であった。それは、経済的な問題が影響していると考えられる (宮崎, 2016, p.105)。Gindling and Trejos (2013) によると、コスタリカでは 1990 年代から教育に力を入れ、教育水準は向上したが、地方の教育の質等は都市部より劣っていたため、地方と都市部に教育格差が生まれた。2000 年代に中等、高等教育を受けた労働者の相対需要と実質所得が上昇したことから、都市部と地方で所得格差が生まれた (Gindling and Trejos, 2013)。したがって、地方では経済的な影響により野球用具を所有している選手が少なかったと考えられる。

以上のように、コスタリカ国内では、野球用具を製造しておらず、選手たちは隣国や EC サイトを通じて野球用具を入手していた。また、JICA による野球用具の支援や経済的な側面から野球用具を個人所有している選手は、都市部で多く、地方で少なかった。したがって、経済的側面によるハード面における野球用具の課題が挙げられた。

#### IV コスタリカ野球のソフト面

ソフト面として、組織の運営と活動の実態に着目したい。まず、コスタリカにおける野球組織の実態は、サントドミニゴ野球協会をはじめとした野球協会が複数あり、それらをコスタリカ野球連盟 (Federación Costarricense de Béisbol) が統括している。これら野球協会は、日本のような学校単位の部活動ではなく、スポーツ少年団のように地域住民が運営し、それらをコスタリカ野球連盟がまとめていた。現在は、コスタリカ野球連盟とサントドミニゴ野球協会に JICA 野球隊員が派遣されている。組織の運営および普及・振興活動については、サントドミニゴ野球協会の具体例をあげる。

サントドミニゴ野球協会は 2008 年から JICA 野球隊員の派遣が開始された。宮崎 (2016) による

と、サントドミニゴ市は地域の協力体制が強く、JICAによる活動もあり、コスタリカでは珍しく野球文化が定着した地域とされている（宮崎、2016, p.105）。また、サントドミニゴ野球協会は、大会や指導者講習会を開催するなどコスタリカ野球を中心的な役割を担っている（宮崎、2016, p.105）。そのサントドミニゴ野球協会の活動目的は、日本式野球を通してより良い市民を育成すること、青少年育成をすることであり、特に、子どもたちの協調性・忍耐力を身に付け、心身ともに健全な育成を目指し、社会貢献をすることである（JICA 海外協力隊, online2, 宮崎, 2016）。このような経緯もあり、JICA 野球隊員の受け入れ、2016 年から 2020 年の 5 年間桜美林大学野球部の 10 人から 15 人の学生の受け入れを行なっている。

次に、サントドミニゴ野球協会の運営はコスタリカ人が中心となって行なっている。具体的には、会長、副会長、書記をはじめとする八つの役職を投票により選出している。選出された役員が毎週月曜日の 20 時から会議を行い、野球協会の活動や指導の方針などを決めている。サントドミニゴ野球協会の運営で決定した活動方針は、大別すると野球の普及活動と振興活動がある。まず、野球の普及活動は主に、小学校に訪問し、体育の授業でベースボール型授業を行うこと、コスタリカ国立大学（Universidad Nacional Costa Rica）で正規科目の授業である「野球・ソフトボールの学習・指導（Aprendizaje y Enseñanza del Beisbol-Softbol）」を教えることである（Universidad Nacional Costa Rica, online）。具体的には、サントドミニゴ野球協会の周辺にある小学校に平日午前 8 時から午後 12 時の時間に訪問し、体育の時間にベースボール型授業を実施している。また、コスタリカ国立大学では火曜日の午前 8 時から 11 時の時間に「野球・ソフトボールの学習・指導」を実施している。これらの活動は平日の午前中に行われるため、JICA 野球隊員が普及活動を担っている。

なお、これらの活動をするためのコーディネートにおいては、コスタリカ人が担当している。

次に、野球の振興活動では、主に野球協会に所属する選手に対する野球の技術指導を行なっている。サントドミニゴ野球協会では、月曜日から木曜日の 18 時から 21 時に夜間練習、土曜日の 8 時 30 分から 15 時に練習および試合を行なっている。また、学校の長期休暇期間では、上記の時間に加え、月曜日から木曜日の午前 8 時 30 分から 12 時に練習を提供している。JICA 野球隊員は全ての野球の技術指導の活動に従事している。一方で、コスタリカ人指導者は土曜日の活動に参加しているが、コスタリカ人指導者の多くが仕事の都合上で平日の夜間練習に参加できないことが多い。具体的には、フィールドワークを行なった 2018 年のこの期間に、サントドミニゴ野球協会のコスタリカ人指導者は 8 人いたが、平日の夜間練習に参加していた指導者は多い時で 3 人、0 人の時もあった。土曜日はほとんどのコスタリカ人指導者が参加し、カテゴリーを分担して指導していた。また、学校の長期休暇期間の午前練習は、JICA 野球隊員が指導し、コスタリカ人指導者は参加していないかった。

以上のように、サントドミニゴ野球協会はコスタリカ人により運営されているが、普及や指導の活動で JICA 野球隊員に大きく頼っている部分があった。サントドミニゴ野球協会において、野球の指導はボランティアであり、自らの生計を立てる仕事が優先される。そのため、普及・振興活動で JICA 野球隊員に頼らざるを得ない現状であったといえる。

## V おわりに

日本は、JICA を中心に開発途上国で野球の普及・振興活動を長年行ってきたが、それらの活動やその国の野球の現状における研究の蓄積が少

ない現状にあった。そのため、本研究では、1974年からJICAによる野球の普及・振興活動が行われてきたコスタリカを事例として明らかにしてきた。

本研究の結果から、コスタリカの首都圏においては、野球専用グラウンドが充実しており、野球用具も個人所有している選手が多いことが明らかになった。一方で、地方では野球用具の貸し出しを行っている野球協会があり、野球用具が不足していることが課題であった。また、ソフト面においては、コスタリカ人自らが野球協会を運営している一方で、普及活動ではJICA野球隊員に頼りきりであることが課題であることも明らかとなつた。

本研究を踏まえた上でコスタリカ野球の実態調査における今後の課題について二つ述べる。まず、コスタリカ野球におけるソフト面についてより詳細な調査を進めることが必要である。特に、野球協会の運営に関する資金やその調達方法の調査、さらに、野球協会の予算の内訳や資金調達先、資金の使途、さらに協会の収益源やスポンサーの存在などについて明らかにし、野球協会が持続可能な運営を行うための戦略や施策を構築することが重要であると考えられる。最後に、コスタリカ全域の野球の実態についての基礎調査および研究を進めることが課題である。本研究では首都圏を中心調査を行ったが、首都圏が抱えるハード面、ソフト面の課題と地方におけるそれらの課題には隔たりが存在する可能性がある。そのため、基礎調査および研究を進めることで、コスタリカ野球の全容が明らかになると期待される。

### 【注】

- (1) 新型コロナウイルス感染症の世界的パンデミックによる影響により、JICA野球隊員の派遣は一時中断していたが、JICA海外協力隊の2022年度春募集でサントドミニゴ野球協会の公募があった。そのため、派遣前訓練を経て派遣が開始される。
- (2) WBSCランキングは、フル代表からU-23、U-18、

U-15、U-12までの代表が国際大会に出場およびその成績によってポイントが得られ、その加算されたポイントの順位である。2019年12月31日時点では、85の国と地域がポイントを保有している。また、コスタリカのWBSCランキングは、2019年12月31日時点では78位であったが、2023年3月28日に更新されたWBSCランキングでは61位に上昇した。本研究の調査を実施した時期が2019年であるため、最新のWBSCランキングを使用しないこととした。

### 【文献】

- Federación Costarricense de Béisbol (online) El Béisbol en Costa Rica: El Béisbol en Costa Rica. <https://www.fcbeisbol.org/el-beisbol-en-costa-rica/>, (参照日 2023年4月18日).
- Federación Costarricense de Fútbol (online) FCRF. <https://www.fedefutbol.com>, (参照日 2023年4月18日).
- 外務省 (online) 国地域: 中南米: コスタリカ共和国: コスタリカ基礎データ. <https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/costarica/data.html>, (参照日 2023年4月18日).
- Gindling, T. H., & Trejos, J. D. (2013) The Distribution of Income in Central America. IZA Discussion Paper No 7236, Bonn, Germany.
- Gordon, D. (2006) Nicaragua: In Search of Diamonds. In: George Gmelch (Ed.) Baseball without Borders: The International Pastime. Bison Books: 172-195.
- IOC (2005) OLYMPIC PROGRAMME COMMISSION REPORT TO THE 117TH IOC SESSION. [https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/IOC/Who-We-Are/Commissions/Olympic-Programme/EN-Olympic-Programme-Commission-Report-to-the-117th-IOC-Session.pdf#\\_ga=2.128643464.501305894.1615100883-1176194654.1614610616](https://stillmedab.olympic.org/media/Document%20Library/OlympicOrg/IOC/Who-We-Are/Commissions/Olympic-Programme/EN-Olympic-Programme-Commission-Report-to-the-117th-IOC-Session.pdf#_ga=2.128643464.501305894.1615100883-1176194654.1614610616), (参照日 2023年4月18日).
- IOC (online) Olympic Agenda 2020. <https://stillmed.olympics.com/media/Document%20Library/OlympicOrg/Documents/Olympic-Agenda-2020/Olympic-Agenda-2020-Context-and-Background.pdf>, (参照日 2023年4月18日).
- 石原豊一 (2011) 開発援助アクターとしてのスポーツNGO. 立命館人間科学研究, 22 : 97-106.
- 石原豊一 (2019) アフリカ発の「プロ野球選手」から見るSDP活動の現状とその課題—日本のアクターによるアフリカにおける野球普及活動を事例として—. スポーツ社会学研究, 27 (1) : 75-89.
- JICA (online) 独立行政法人国際協力機構: 事業・プロジェクト: 事業ごとの取り組み: 市民参加: 大学の皆さまへ. <https://www.jica.go.jp/partner/college/index.html>, (参照日 2023年4月18日).
- JICA 海外協力隊 (online) JICA海外協力隊ホーム: JICAボランティア事業の概要: 事業実績/派遣実績【青年海外協力隊/海外協力隊】. <https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/results/jocv.html>, (参照日 2023年4月18日).

- JICA 海外協力隊 (online2) JICA 海外協力隊ホームページ：募集情報：長期一般案件養成・職種情報：職種別一覧：2022年度春（募集終了）：(G124) 野球：コスタリカコスタリカ野球連盟. <https://www.jocv-info.jica.go.jp/jv/index.php?m=Info&yID=JL21522A05>, (参照日 2023年4月18日).
- 岸野雄三編 (1987) 最新スポーツ大事典. 大修館書店.
- Masis A., Miguel A. (2006) Historia del béisbol: origen y revolución en los Estados Unidos y Costa Rica. Editorial Costa Rica.
- McGehee, R.V. (2002) Sport in Nicaragua, 1889-1926. In: Joseph L. Arbena and David G. LaFrance (Eds.) Sport in Latin America and the Caribbean. Scholarly Resources Inc.: 175-205.
- 宮崎光次 (2016) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第1報）—コスタリカ共和国における野球指導—. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 7: 95-112.
- 宮崎光次 (2017) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第2報）—2016年コスタリカ共和国における野球指導—. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 8: 37-50.
- 宮崎光次 (2018) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第3報）—2年間のコスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果—. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 9: 75-86.
- 宮崎光次 (2019) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第4報）—コスタリカ共和国における野球ボランティア活動の成果と学生の成長—. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 10: 17-29.
- 宮崎光次 (2020) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第5報）—コスタリカ共和国における野球ボランティア活動4年間の成果—. 桜美林論考. 自然科学・総合科学研究, 11: 12-24.
- 宮崎光次 (2021) スポーツによるグローバル人材の育成に関する研究（第6報）：コスタリカ共和国における野球ボランティア活動5年間の総括. 桜美林大学研究紀要. 総合人間科学研究, 1: 167-176.
- 中村太郎・鈴田智大・有働卓冬・井上弘太・谷口龍成・東山力也・高石夏輝・井上直人 (2019) [報告] JICA 近畿大学連携ボランティア事業—ペルー共和国野球振興支援 ボランティア連携に参加して—. かやのもり：近畿大学産業理工学部研究報告, (30): 118-121.
- NHK (online) NHK WEB サッカーワールドカップカターリ 2022：出場チーム：コスタリカ代表日程・結果・ニュース. [https://www3.nhk.or.jp/news/special/soccer\\_worldcup/2022/team/article/costa-rica.html](https://www3.nhk.or.jp/news/special/soccer_worldcup/2022/team/article/costa-rica.html), (参照日 2023年4月18日).
- OECD (online) Development Co-operation Directorate: Financing for sustainable development: Development finance standards: DAC List of ODA Recipients: DAC List of ODA Recipients Effective for reporting on aid in 2018 and 2019. <http://www.oecd.org/dac/financing-sustainable-development/development-finance-standards/DAC-List-of-ODA-Recipients-for-reporting-2018-and-2019-flows.pdf>, (参照日 2023年4月18日).
- ピーター・チャップマン (2018) バナナのグローバル・ヒストリー：いかにしてユナイテッド・フルーツは世界を席巻したか. 小澤卓也・立川ジェームズ訳, ミネルヴァ書房.
- 鈴木啓祐 (1984) コスタリカ共和国の鉄道史の記録に関する考察. 流通経済大学論集, 18 (4): 1-14.
- 瀧元誠樹・増田敦・金誠・東原文郎・出合祐太 (2011) ブルキナファソにおける野球の普及について. 比較文化論叢：札幌大学文化学部紀要, 26: 7-29.
- 角上征太郎・清田龍・金城舜・野木鵬太・東優勝・下村航平・清水裕司・田上啓一郎 (2015) [報告] 第3回 JICA 短期ボランティアに参加して—ペルー野球派遣で学んだこと—. かやのもり：近畿大学産業理工学部研究報告, (22): 66-71.
- Universidad Nacional Costa Rica (online) INICIO: ESCUELA DE CIENCIAS DEL MOVIMIENTO HUMANO Y CALIDAD DE VIDA. <https://www.ciemhcavi.una.ac.cr/index.php/plan-de-estudios>, (参照日 2023年4月18日).
- WBSC (online1) DEVELOPMENT PROGRAMMES 2017-2021. <https://static.wbsc.org/assets/cms/documents/84296bea-882c-4a96-95d2-835abbe6120a.pdf>, (参照日 2023年4月18日).
- WBSC (online2) DEVELOPMENT PROGRAMMES 2022-2024. <https://static.wbsc.org/assets/cms/documents/1085294b-9d51-81f4-7db3-7fa8d048e1aa.pdf>, (参照日 2023年4月18日).
- WBSC (online3) WBSC: ランキング: 男子野球: 31/12/19. <https://rankings.wbsc.org/ja/list/baseball/men/world/2019-12-31>, (参照日 2023年4月18日).
- World Bank (online1) THE WORLD BANK: Population, total: Costa Rica. <https://data.worldbank.org/indicator/SP.POP.TOTL?locations=CR>, (参照日 2023年4月18日).
- World Bank (online2) THE WORLD BANK: GDP (current US \$): Costa Rica. <https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.MKTP.CD?locations=CR>, (参照日 2023年4月18日).
- World Bank (online3) THE WORLD BANK: GDP per capita (current US \$): Costa Rica. <https://data.worldbank.org/indicator/NY.GDP.PCAP.CD?locations=CR>, (参照日 2023年4月18日).
- World Bank (online4) THE WORLD BANK: GNI per capita, Atlas method (current US \$): Costa Rica. <https://data.worldbank.org/indicator/NY.GNP.PCAP.CD?locations=CR>, (参照日 2023年4月18日).
- ジンバブエ野球会 (online) ジンバブエ野球会. <https://zykai2018.jimdofree.com>, (参照日 2023年4月18日).

[謝辞]

本研究のフィールドワークにご協力いただいたサントド  
ミンゴ野球協会の会長、副会長をはじめとする役員の皆様、  
同協会に所属する野球選手とその保護者の皆様、そして、  
当時の JICA 野球隊員の方に心より感謝申し上げます。